

るものがある。心配するな。弟子の準備ができたら師匠が現れるぞ。」

川崎さんと遇った御縁 自力無効 なんまんだぶつ

生活は仏法である

鷲元明俊

川崎弘光氏が2024（令和6）年1月28日に、寿算69歳で往生された。

彼は上宮寺の百日晨朝参拜に2015（平成27）年から参加され、2019（令和元）年まで247日間通われた篤信の念仏者であります。お参りの後に数人で茶話会を行い、彼はその茶話会を楽しみにしていました。彼は仏縁が深く、全国各地の法座に参加し、お聴聞の達人と出会っておられました。茶話会では、そういう出会いの体験を話してくれました。

福井に小山貞子さんという篤信の念仏者がいます。彼女に或る方が、「仏法を聞くときはどのように聞けばいいんですか」と訊ねました。すると彼女は、「仏法は頭で聞いてはいけません。頭には麻薬が入っています。ただ何となく聞くものです」と答えられたと話してくれました。わたしは、「ただ、何となく」というのが、意味深く感じます。仏法は感性だと思います。仏法聴聞によって如来のお慈悲を深く感じていくとか、如来の智慧の目を頂き、苦悩を転じていく視点を頂き、“ハッ”とすることだと思います。ですから、川崎さんを見ている聴聞中にメモや録音を決して行いませんでした。彼に「聞いたものをもって帰るな」「手ぶらで帰れ」と教えられていたからです。

仏法は頭で理解し覚えるものではなく、生活の中で感じるものだからです。如来さまと共に生きる生活、生活の中に生きる仏法でなければ何の意味もないことを、川崎さんは私に教えてくれました。

表題の「生活は仏法である」は、小山さんの言葉です。彼とご縁を頂き、多賀の自宅に度々お邪魔いたしました。彼は独身で、一人暮らしでしたが、きれいに整頓され、スツキリとした生活をしていました。「掃除もできない者は仕事もできない」「掃除は隅が大事、仏教でも一隅を照らす者を国の宝とするというだろう」と言っていたことが心に残っています。

川崎さんは、68年間の人生の中で40年間、透析に通われました。まさに、重荷を背負った人生です。晩年は透析による心不全で手足がむくみ、不自由な生活を送られました。身体が不自由になり、それを助ける爲にお念仏の友人が自宅を訪れてくれるようになったと言います。そして、そこで仏法談議が始まる。彼は自宅に「不自由の中の自在庵」という表札を掲げ、念仏道場にしました。いつも不思議に思うのは、彼と別れた後また一人になるのに、彼は淡々と平気で生きているのです。独立者とは、彼のような人をいうのではないかと思います。それができるのは、如来さまと二人連れの人生だったからではないでしょうか。あるお寺の一月の掲示板に

一人いて喜ばば 二人と思うべし その一人と 今年も歩く

とありましたが、それが彼の生きざまだったような気がします。彼とは短い時間の交流でしたが、深い世界を教えていただいたことを感謝いたします。